慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「ささめこと」の諸本の考察
Sub Title	A comparative study of various manuscripts of Sasamekoto
Author	東浦, 佳子(Higashiura, Yoshiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.16, (1963. 10) ,p.17- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ささめこと」の諸本の考察

東浦佳子

一、序説

心敬作「ささめこと」の諸本について木藤才蔵氏は日本古典文学大系所収「ささめこと」の解説に於て、草案本系と考えられるものと、改編本系と考えられるものに大別され、同大系が底本としている尊経閣本は草案本系、群書類従が底本としている書陵部本は改編本系としていられる。この二種の本の間には相当に本文の相違があり、何れが草案であるかと云う事は一応別にしても、両者が違った系統のものである事は肯かれる。

「ささめこと」の著作年代についても、諸本の奥書に三種あり

寛正二年　書陵部本
寛正四年　天理本
寛正五年　苔莚本

となっている。この奥書を信ずれば、書陵部本が最も古い事になり、それが改編本であると云う事と矛盾する点が問題になっている。

この点に関して木藤氏は、心敬の百首和歌の註などを参照して寛正四年著作説をとり、書陵部本は草案を書いてからかなり後に書いたもので、記憶も薄れたので寛正四年を二年と書き誤ったものと推定されている。(註(1))

伊地知鉄男氏も、上巻の成立については寛正四年説をとり、下巻はそれ以後寛正五年五月迄の成立で、寛正二年と云うのは、記憶違いか或は、四を二又は二二と書いたものの読み違いであろうと説かれている。(註(2)) 木藤氏、伊地知氏共に、書陵部本の成立年時については言及していられない。

草案、改編の関係について木藤氏は、天理本と群書類従本を比較し、後者が前者の二段を一段にするなど整理された形をとっているところから、天理本と同系のものを草案本、群書類従本及び旧国立上野図書館本を改編本とされたのである。

その改編者について同氏は『心敬のものと普通認められている花押と群書類従の底本の花押とが非常に異ること、整理がやや機械的であることを理由に、心敬以外の人の整理によるものと考えられなくもないが、しかしこれ丈では根拠が薄弱で、群書類従本独自の本文の中に心敬らしい文章が多いところから、改編者はやはり心敬自身であろう』と考えていられる。

しかし書陵部本の筆者については、心敬の自筆と伝えられているけれども心敬の筆ではないと木藤氏は推定され、伊地知氏も、恐らく心敬筆か或は原本に近いものをその筆跡をある程度似せて写したものであろうと考えていられる。

「ささめこと」の諸本に関する先学の諸説の大要は以上の様なものであるが、ここで天理本と同系の尊経閣本を底本として校合された日本古典文学大系の本文と、書陵部本とをその内容の面から比較して考察し、両本の性格を考える一助にいたしたい。

二、各段の配列について

『ささめこと』の記述は問答体をとっているが、木藤氏は天理本と群書類従本とを比較する場合、一つの問とその答からなる一区切りの文章を一段として、天理本は六十二段、群書類従本は五十三段に区切られている。同氏校訂の日本古典文学大系所収のものも、天理本と同じく六十二段に分たれている。

木藤氏も述べられる通り、天理本と群書類従本の間では、類従本の一段が天理本の二段或はそれ以上に相当する場合のある事が知られる。それは主として、天理本では同じ趣旨の問が二つあり、二段を形造っているのに対し、類従本ではそれが一つの問のもとにまとめられ一段とされると云う形になっているので、同氏は、類従本をばら〳〵にして天理本にしたと云うより、天理本の各段を整理して類従本にしたものと推論されている。この事は尊経閣本（以下、日本古典文学大系所収のものを用いる）と書陵部本とを対比した場合も同じであって、木藤氏の説が肯かれる。

この様な段数の整理はある程度段の配列の相違を伴う。しかしこの両本の間には単にそれ丈ではない配列の相違が見られるのではないかと考えられる。

「ささめこと」の諸論は、史的叙述、本質論、修行論の三つに大別しうる。勿論これらの各論が入り混って明確に区別のつけ難い部分もある。

この三種の論がいかに配列されているかについて考えると、史的叙述六段のうち五段は、両系の本とも上巻の冒頭にある。尊経閣本の第三十九段の一部の連歌の歴史を述べる部分は、上巻の終りに近く、十体の例句の前にある。書陵部本ではやはり上巻の終りに近いところにあるが、十体の例句の後にある点が異っている。

内容論、修行論の部分に関しては、尊経閣本の上巻にあるものが、書陵部本では下巻に、或は尊経閣本の下巻のものが書陵部本では上巻になっている場合がかなりある。具体的にみると次の様になる。

(1) 尊経閣本で上巻にあり、書陵部本で下巻にある段

第七段　第十三段　第十五段　第十六段　第十七段　第十九段　第二十段　第二十二段

第二十五段　第二十七段　第三十三段　第三十六段　第三十七段　第三十八段　第三十九段（段の句切りは木藤氏のものによる）

右の様になり、大別すれば○印のものが本質論、他は修行論と考えられるもので、下巻に移っているものには修行論が多い。

(2) 尊経閣本の下巻にあって書陵部本の上巻にあるもの。

第四十段　第四十二段　第四十三段　第四十四段　第四十五段　第四十六段　第四十七段　第五十二段

これによると、○印の本質論が大部分である。

以上の(1)(2)を綜合すると、尊経閣本に於ては、本質論、修行論が上下巻に入り混っているが、書陵部本では本質論はおゝむね上巻に、修行論は主として下巻に集めると云う形をとっている。この結果、全体として書陵部本では、上巻に修行論は少く、下巻に本質論は僅かになっているので、史的叙述と本質論は上巻に、下巻は主として修行論と云う様に整った形をとっている。

この事について考えると、書陵部本の配列を更に尊経閣本の様に、本質論、修行論の入り混ったものに分解したと云うより、尊経閣本を意識的にこの様に整理して作ったのが書陵部本であると考えた方が妥当である。

三、両本の内容の比較

両本の内容面での比較を行うのであるが、各本に独自の本文をあげ、更に二本の間に、文章と云うよりはごく短い語句の相違のあるものを対比すると云う方法をとりたい。これによって二本の内容の主たる相違は伺いうると考えられる。更にこの相違について具体的にその内容の妥当性を考察する事によって、二本の草案改編関係を考える一助になし得よう。各本独自の文章をあげる場合、こまかい言葉は違っても内容の同意のものはこゝにあげなかった。

㈠　尊経閣本独自の本文

尊経閣本独自の本文の主たるものゝ所在を次にあげる。

尊経閣本独自の本文　　頁数は日本古典文学大系所収のものによる

番号	自 頁	自 行	至 頁	至 行
1	一二六	二		
2	一二六	四		
3	一二七	一二	一二七	一五
4	一二七	一六	一二九	四

番号	自 頁	自 行	至 頁	至 行
5	一二九	五	一三二	二
6	一三五	一〇		
7	一四三	一四		
8	一四七	一三	一四七	一五

| | | |

(34)番は下巻の末の『十徳』に関する記述であるが、尊経閣本、書陵部本、旧上野図書館本の間に相違がある。

尊経閣本　仏法器七宝　歌道七賊

書陵部本　文の七徳　仏法宝　歌道宝

上野図書館本　文の七徳　仏法宝　歌道宝　歌道賊

これ丈では三本の先後関係は判然としないが、上野図書館本が最も多くの内容をもつ点で、他の二本を考勘してこの様に整理したものとも考えられる。

以上の尊経閣本独自の本文についてみると、同本に特に著しい特色をもつ部分は見当らない。

(二)　書陵部本独自の本文

次の通りである

書陵部本独自の本文

番号	自 頁	自 行	至 頁	至 行
1	上巻一三	六	一三	七
2	一八	五	一九	一〇
3	二二	三	二二	四
4	二三	五	二五	四
5	三二	一	三三	五
6	四五	六	四五	七
7	四七	二	四七	四
8	五六	三	五六	五
9	五七	二	五七	三
10	七六	一	七六	二
11	七七	一	七七	一〇

番号	自 頁	自 行	至 頁	至 行
12	九八	三	九八	四
13	一〇一	五		
14	一〇五	一	一〇五	五
15	下巻二	六		
16	四	四	四	八
17	五	六	五	七
18	六	三	六	四
19	三七	七	三七	九
20	三八	三	三八	四
21	五三	七	五三	八
22	五七	六	五七	一〇

23	24	25	26	27	28	29	上	一	二	三	四	五	六
五八	六一	七〇	九〇	九二	九三	一〇四	一	九二	九三	一〇四	五	六	九
九	九	三	七										
五九			九〇										
六			八										

その中で問題となる部分について考察する。

(2)番について。尊経閣本では第四段に、

水無瀬の宮の御代にぞ古にもをさ〳〵こえたる歌の聖……

とあり、新古今集の時代を重視しているが、特に「新古今集」の名をあげている部分は一ケ所も無い。書陵部本がここで、「新古今集」の名をあげ、更に同時代の秀れた作者の名をあげているのは注目される。

(4)番の部分は、脇の句に関する記述である。「ささめこと」に見られる連歌論は概ね抽象的なものであって、一巻の各句の作り方などを具体的に説く事は少いが、僅かに発句について説明している個所がある。書陵部本では更に、発句に関連して脇の句に言及している点で尊経閣本と異る。こゝに引用された

冬さくむめにましるくれ竹

の脇は、心敬の「ひとりごと」にも引用されている。

(9)番。これは、

かたりなはそのさひしさやなからましはせうに過る夜はのむら雨

の歌であって、書陵部本のこの歌のあげ方が問題である。即ちこの部分は一群の不明躰歌の例があげられたあと地の文があり、次ぎにこの歌一首丈を地の文より下げて、あたかも中国の故事や仏教の例を引用するのと同様な形であげている。この歌が不明躰歌の例としてあげられているのか、或は『語らぬ方がいゝ』と云う意味を強調してこの歌自体を一つのたとえとして用いているのかあいまいである。

(11)番、和泉式部が、娘の小式部の死に際して詠んだ

のこしをきていつれあはれと思ふらん子はまさりけり子はまさるらん

の歌及び説明の文章である。この歌は題詠ではなく実感として歌われたものと思われるので、「題をめぐらす歌」について説明しているこの部分に書陵部本がこの歌をあげているのは適当でない。

しかしこの和泉式部の歌及びそれに関する説明と類似の記述が、尊経閣本系の苔莚本にも存する。

(22)番は近頃の連歌に対する痛烈な批判の語である。尊経閣本にはこの様な記述はないが心敬の後の著作「老のくりこと」に書陵部本のこの部分と同種の考え方が見られる。

(15)番は次の様な文章である。

歌には一首のうち上下の親句疎句のこと専侍り序枕こと葉をなか〳〵しくをき下の句にことはりをいひあらはし侍る歌は上の句は疎句下の句は親句也　又各一首つゝの上にも親疎の哥侍ると也　上下のくさりしたしく心えやすくいひはてたるは親句の哥也　又上の句と下の句と心たに通し侍れはあらぬさまの事をもほしきまゝに継たるは疎句の歌なるへしと也

この中で特に、一首のうちで、序枕詞の部を疎句とする考え方は注目される。この種の考え方は尊経閣本には見られない。

以上の他、(8)(14)(29)などの書陵部本の文章はこれがある為に尊経閣本よりはわかり易い記述になっている。

以上によれば、書陵部本独自の文章に特色のあるものの多い事が知られる。

両本独自の文章のうち、儒教仏教関係の云い伝えを比喩的に用いたものを考えると、

尊経閣本独自のもの15例（うち仏教関係3例）

書陵部本独自のもの9例（うち仏教関係5例）

となり、尊経閣本では中国関係の故事を引く事が多く、書陵部本では仏教関係の引用が多い。

(三)　こまかい語句の相違

前記(一)、(二)では比較的長い文章の各本独自のものについて考えたが、つぎに一文の中の短い語句が両本で相違しているもののうち、

特にその相違が大きな意味の違いをもつものをあげたい。この小さい部分の相違はその量が少い故にと看過されてよいものとは云えない。

特に問題となるようなものは86例ばかりみられた、そのうち、他の文献に照して何れか一方が正しいと定められるものは六例あり、うち尊経閣本の正しいもの三例、書陵部本の正しいもの三例である。即ち此の部分である。（頁数は日本古典文学大系のもの、◎印が正しいもの）

◎源信明朝臣　（尊経閣本一七五頁）
源公忠　（書陵部本）

秋露梧桐葉落時（尊経閣本一七八頁）
◎秋雨梧桐葉落時（書陵部本）

筏士よ待てことはむ水上はいかはかり吹くみねの嵐ぞ（尊経閣本一八四頁）
◎筏士よ待てことはむ水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ　（書陵部本）

大弐高遠　（尊経閣本一九〇頁）
◎源頼実　（書陵部本）

◎人能く道を弘む道能く人を弘めず（尊経閣本一九四頁）
人能道をひろむ文人をひろめす　（書陵部本）

◎庭前柏樹子　（尊経閣本　二〇二頁）
　庭前柏樹　（書陵部本）

この六例の様に真偽を証するものはないが、前後の文章から考えて何れか一方の本の方がよいと思われるものは二十三例ある。うち尊経閣本がよいもの七例、書陵部本がよいもの十六例である。

この他のものは何れの記述が正しいか判然とせぬものであるがそのすべてをあげる事はこゝでは不可能なので、その中注目されるものについて考察する。

(1) 万葉集、古今集、伊勢物語などの……（尊経閣本　一三二頁）
　万葉集、三代集、伊勢物語（書陵部本）

心敬の他の論著等の用例にてらした丈ではこの両本の記述のうち何れが妥当かは決められない。

(2) 長高き体とてやせさむき体（尊経閣本　一三二頁）
　長高き体とてやせひえたる体（書陵部本）

(3) 古人の句は……しなゆうたけらうたく（尊経閣本　一三三頁）
　古人の句は……しなたけひえらうたく（書陵部本）

(4) しなゆうたけやせさむくらう〳〵しく（尊経閣本　一四〇頁）
　しなたけやせさむくらう〳〵しく（書陵部本）

(5) 情けふかく覚え侍れ（尊経閣本　一四三頁）
　艶ふかきことにや（書陵部本）

情けふかき言葉也（尊経閣本　一九六頁）
えんの事也（書陵部本）

こゝでは二個所で、『情ふかし』を『えん』に変えているのが注目され心敬の『えん』を考える一助になろう。

(6) 門真　（尊経閣本　一六〇頁）
寂意　（書陵部本）

門真と寂意は同一人物であり、この句の作著は、菟玖波集によれば、木鎮法師になっているので、両本とも誤りである。

(7) 言葉づかひのようをむの句（尊経閣本　一七八頁）
言葉づかひの幽玄の句（書陵部本）

以上の概観によれば、短い語句の相違する個所について『源信明朝臣』の様に書陵部本のあやまりの場合もあるが、同本の大きなあやまりはこゝ一ケ所であり、全体に尊経閣本よりも書陵部本をとる方が意味の通ずる個処が多い。

更に文中で連歌士達の事を云う場合、尊経閣本では
田舎ほとりの人、かたつ田舎などのともがら、田舎人
などの云い方が多くみられるのに対し、書陵部本ではこれらに対する個処で
大かたの一座、かたへの好士、大かたの好士
と云った比較的穏かな云い方をしている。こうした点でも書陵部本の方が整頓された形と云える。

この短い語句の対比の中で注目されるのは、細かい語句の相違を通して、美的理念を表す語の用い方が両本で異る部分のある事で、これについては更に後述したい。

四、両本内容の問題点

両書の内容の相違の主なものは以上であるが、そこにみられた相違のうち問題点と考えられるものについてつぎに考察したい。

㈠　新古今集についての言及

心敬は「ささめこと」で、新古今集時代の作者を賞揚しているが、尊経閣本では、

水無瀬の宮の御代にぞ古にもをさ〳〵こえたる歌の聖数をつくしていまそかりける

と第四段で述べている。

書陵部本にも尊経閣本と略々同様の記述があるが、続いて

自在無窮不可説の風雅をつくし此道のさとりを得べきは新古今集辺の歌仙の作なるべし

と、はっきり「新古今集」の名をあげ

御製　後京極摂政　慈鎮和尚　俊成　定家　家隆　西行　寂蓮

此等の心こと葉さま〴〵の風骨ひとへに大悟発明の不可説のさかゐなり

と、歌人の名をあげている。尊経閣本でも第四十一段に

定家　家隆をさへ猶歌作りと仰せ給ひしとなり　慈鎮　西行をこそ歌よみとは仰せられしか

と述べてはいるが、御製云々の文章はない。

この書陵部本と同じ趣旨の記述が心敬の他の著書にもある。

古人秀歌とも古今集新古今集なとの内の名歌のすかた自讃三躰なとこと葉面影を日夜むねに工夫なくては……（所々返答）

歌にかならす禅教の二道侍るへしと也大かた古今集已来歌人までは教者当分に見え侍るか　新古今集の作者にいたりて悉禅法なとの大悟発明の哥人其世にみち〳〵侍るか　（所々返答）

新古今集のころにいたりての作者の風雅はひとへに無相発明のさかゐなる哉　（岩橋下）

水無瀬殿御代にそよろつ落しつまりとも此権者の歌仙数を尽していまそかりける
御製　後京極摂政　慈鎮和尚　俊成　定家　家隆　西行　寂蓮
さらに清岩和尚ぞ……（老のくりこと）

慈鎮和尚　定家卿なとは几生をはなれ……
御鳥羽院　後京極殿　俊成卿　家隆卿　西行法師　秀能
女房には式子内親王　俊成卿女　宮内卿　（所々返答）

これらは何れも、はっきり「新古今集」の名をあげ、「老のくりごと」「所々返答」にあげられている作者名も、秀能及び女房の名以外は書陵部本の記述と同じてある。

細かくみれば、前頁引用の水無瀬殿云々の文に於て、同趣旨の文のある尊経閣本では、『水無瀬の宮の』とあり、書陵部本は、『水無瀬どの』とあって、「老のくりごと」と書陵部本が同じである。同文中の、『歌仙数をつくして』の部分も、書陵部本は「老のくりと」に同じで、尊経閣本は『歌聖』となっているのである。

これらの記述によって心敬の「新古今集」重視の思想が知られるが、尊経閣本でははっきりその名をあげていない。御製云々の文も尊経閣本には無いので、この点に関する限り、書陵部本が心敬の後の諸著作に近い記述を持つ事が知られる。

㈡　美的理念の問題

心敬は「ひとりごと」の中で、

氷ほどえんなるものはなし

と云い、「ささめこと」でも『心の艶』を重視している。この『えん』の他にも、心敬はその論著の中で、美的理念を表す語をいくつか用いている。「ささめこと」の両本の語句の相違の対比をした中に注目されるものがある。

さきにこまかい語句の相違の項であげた、(2)(3)(4)の各例の場合である。

この中で(2)の場合は語句の相違に大きな意味の相違とはならない。(3)の例では、尊経閣本の『ゆう』の語が書陵部本では『ひえ』に代っている。(4)の場合は尊経閣本の『ゆう』の語が書陵部本に無い。

これ以外に尊経閣本第十段に

発句は……大やうにゆう〳〵とさしのびたる……

とあり、書陵部本のこれに当る部分は

さやうにさしのびたる……

となっている。『ゆう〳〵』がどう云う概念を表すかは問題であるが、書陵部本ではこの語が除かれている。

以上によると、尊経閣本では一貫して『ゆう』と云う語が、その美的理念を表す一つのものとして用いられ、これに対して書陵部本では『ひえ』の語が用いられている。

『ゆう』と云う語については、『優』『幽』などが考えられるが、前後の文章から、『優』に当るものと考えられる。木藤氏も(3)の例の『ゆう』を『優美』を解され、前記の『ゆう〳〵』には『優々と』の字を当てていられる。歌論で云われる『いうなる姿』などと同じ系統のものであろう。

「ささめこと」全巻を通じて『ゆう』の語は、尊経閣本に3例あり、書陵部本にはない。『ひえ』の語は尊経閣本に1例、書陵部本に3例存する。

以上によれば、心敬は尊経閣本「ささめこと」を書いていた時は『ゆう』の概念を重視していたが、書陵部本を書いた時は『ひえ』の概念を重視していたと考えられる。心敬の著作の中では「ささめこと」は最も初期の作であるが、心敬のそれ以後の著作についてみると、「ささめこと」尊経閣本が成立したと推定される寛正四年と同年作の百首和歌以外の諸作には、『ひえ』の語が各一、二例見られる。一方『ゆう』の語は「岩橋下」と「老のくりこと」に各一例づつ『優艶』と云う形で用いられているのみで、他に用例をみない。

以上の点から考えて、心敬が初期には『ゆう』を重視したが、次第に次潜的な『ひえ』を重んずる様になったと云う、美的理念の上

での変遷が見られる。「ささめこと」に関して云えば、書陵部本の方が尊経閣本よりも晩年の作に近い記述をもち、書陵部本を改編本と考える場合には、それを証する一つの例となろう。

㈢　他の著作との表現上の類似

こゝで、尊経閣本と書陵部本の記述と心敬の他の著作との表現上の類似について考えたい。

(1)　新古今集時代の作者についての記述

これについてはさきに述べた通りで、書陵部本の本文と、「所々返答」「老のくりこと」その他との類似がみられた。

(2)　尊経閣本第四段中の記述

さま〳〵の姿をおこし道の奥をきはめ世にときめき（尊経閣本）

さま〳〵の風をしたひ塵をつきて道のおくをきはめ（書陵部本）

慕風継塵一天まことに道の奥旨を極と也（老のくりこと）

これによると、書陵部本の記述と「老のくりこと」のそれとが類似している。この両本の裏には、「古今集」真名序の詞人才子慕風継塵……

の文章がある。

(3)　この頃の連歌のありさまについての記述、尊経閣本第三十九段

されば道のほとり市のなかに千句万句とて耳にみてり（尊経閣本）

あやしのしつ屋、民の市くらなとにも千句万句とて耳にみてり（書陵部本）

いかなるあやしのしつ屋民の市くらなとにも千句万句とて耳にみてる（老のくりこと）

こゝでも、書陵部本と「老のくりこと」との類似がみられる。

(4)　尊経閣本第四十八段

情けあさくあらけなく胸の中おちしづまらぬ人にはおぼろげにも交はるべからず

あら〳〵しく偽りかざりたるおもひも入れぬ友がらにまじはらんもほいなく哉　ことに末たのもしくいときなきかたなどうたて侍るべきこと也（書陵部本）

行末たのもしくわかきかたなどあらけなく思ひいれぬ友にちかつくへからさる……（岩橋下）

この例でも、書陵部本は「岩橋下」に近い記述をもっている。

以上にあげた四例では、何れも書陵部本が、尊経閣本よりもむしろ以後の他の著作と類似の記述をもつ事が知られた。しかもその表現は他の著作と全く同じと云うのではない。

この事は、書陵部本が尊経閣本よりは後の制作であること即ち改編本である事を証する一つの材料と考えられ、又後述する書陵部本の改編者の問題にも関連して来る。

五、改編者の問題

こは迄「ささめこと」の尊経閣本と書陵部本を内容の面から比較した。その結果、各々独自の本文、語句の中では書陵部本をとった方が意味のよく通ると思われる場合の多い事、美的理念などで両本の間に問題のある事が知られ、書陵部本と心敬の他の著作との間に

考え方や表現の類似のある事が知られた。これ等の事から、「ささめこと」のこの両本に関しては、書陵部本の方があとから書かれたものであろうと云う事、更にそれは尊経閣本よりは整理された形の改編本であると云う事が推察される。

つぎに書陵部本が改編本であるなら、その改編者は誰かと云う事が問題になる。

これについて木藤氏は、恐らく心敬自身が改編者であろうと推定を下された。同氏によって、改編がやゝ機械的であると評された個所は、問についてその答が見当違いのものであったり、篇序題興流の段で書陵部本が、「古今集」に篇序題興流についての記述がある如く説明している点などである。これらによればたしかに整った改編とは云い難いが、やはり木藤氏も説かれる様に、この事丈では改編者が心敬ではないとは云い切れない。

こゝで書陵部本独自の本文に注目して、この部分が心敬の文章と考えうるか否かを検討したい。

㈠　新古今集に関する記述について

さきに書陵部本独自の本文の中で「新古今集」を重視している部分をあげ、これと同じ内容の記述が心敬の他の著作に見える事を指摘した。その場合、内容は同じであるが、文章は全く同一と云う訳ではなかった。しかし、『大悟発明』『無相発明』『不可説のさかる』と云った。心敬の各著作に見られる云い方が書陵部本にもあるので、書陵部本の記述は心敬の用語によるものと考えられる。

㈡　脇の句についての記述

心敬の他の著作には脇の句にふれているものは無いが、脇の例をあげている個所はあり、そこでは、書陵部本に収められた

冬さくむめにましるくれ竹　救済

の例句がみられる。（ひとりごと）

更にこの段で心敬が云っている『大やうに一ふしに』『おたしくのとやか』などの云い方は、「ささめこと」尊経閣本その他にもみられるので、脇句についての記述も、心敬自身の考え方を示すものと考えてよかろう。もしこれを心敬以外の者が改編したとするなら、「ひとりごと」その他心敬の各著作を参照し、更に心敬らしい言葉を使ってこの段の文章を作ると云う手のこんだ方法をとった事になるので、やはり心敬自身の記述と見た方がよい。

㈢　連歌会の記述

いささかかの道にも師範を尋ねて学ふならひに侍るに連歌の道にかきり近代はをのれと証得するわさになり行侍るよりひとへによとしまにかろ〳〵しきわさになれりといへり（書陵部本、下五七頁）

この考え方は、

清岩和尚云…いつれも諸道は明師の下に入て日夜庭訓を尽してさかひにいたるならひなるそ　連歌にはわか証得のみにて立所を更に尋侍らすほしきまゝに見え侍ると也　されは率尒あやまちのみおほく侍るといへる……（老のくりこと）

たま〳〵数寄の好士も稽古工夫の方はものうく証得賢出の望のみと見えておもしろく奇特の所にのみ心をかけ…（所々返答）

これらに述べられもるのと同じ趣旨であり、この部分も心敬自身の書き加えと考えられる。

㈣

さきに他の論著と比較して、「友をえらぶべきこと」「この頃の連歌のありさま」「水無瀬どのの御代云々」などの個処で、書陵部本の記述が尊経閣本よりは、「老のくりこと」や「岩橋下」の記述に近い事を知った。しかもこれらの記述が、他の論著にそのまゝ同じと云うのではなく、同種の事を心敬の用いる語彙を用いてよくこなれた文章にされている点で、誰かが心敬の後年の著作を参考にして、それに似せて書陵部本の形に改編したと考えるよりは、心敬自身の改編と考える方が妥当である。

又さきに美的理念の項で、『ゆう』『ひえ』などの概念が「ささめこと」の両本の間で、細かい点に到る迄一貫した態度をもって用いられている点を考えても、これは心敬自身によってこの様になされたと考えられる。

以上の㈠から㈣までで考察したところによれば、書陵部本の本文の中に、他の論著にみられる文章と同趣のものが見え、その用語も同じものが多い点で、同本独自の本文は心敬自身が改編の際書き加えたものと考えられる。

一方、書陵部本独自の本文の中に、心敬の他の論著にみえる記述と矛盾するものは見られない。

更にこの考え方を裏づけるものとして、「老のくりこと」の末の部分をあげて考えたい。即ち、そこには

むかし牧童竹馬のか様の用心共尋侍しにささめこと二冊にすちともなき麁言とも粗しるし侍れはくはしく申侍らはくりこととともなるへく哉

とある。「ささめこと」の跋文、奥書には

此両冊之麁言まことに跡なし事とも也（尊経閣本　跋文）

寛正第四暦蕤賓上旬紀州田井庄想者参籠中或仁連歌竹馬用心之一篇…（天理本奥書）

此二冊之麁言まことに跡なし事共也（書陵部本　跋文）

寛正第二天蕤賓上旬紀州田井庄八王子社参籠中彼辺牧童等連歌竹馬用心一冊…（書陵部本　奥書）

となっていて、横線の部分が両系の本の相違点である。

この書陵部本奥書にみえる『牧童』の話が、「老のくりこと」の前記引用文中にも見える。心敬が『牧童』と云う言葉を使っているのはこと丈ではなく、『村翁牧童』と云う言葉が「ささめこと」尊経閣本の中にもある。

しかし「老のくりこと」のこの部分は、漠然と『牧童』と云ったと云うよりは、『牧童』『竹馬之用心』『麁言』などの云い方から「ささめこと」を手許に置いて、それを意識して「老のくりこと」の文章を記したと考えられる。しかもこの『牧童』と云う語の存在によって、この場合心敬の参照した本は、「ささめこと」の書陵部本か又はその系統のものであったと推定される。

以上に述べた諸点から、書陵部本の編者は、心敬であろうと云う漠然とした推定ではなしに、心敬自身が改編者であると確言してよいと考える。

しかし心敬自身が改編者である事と、書陵部本の筆者が心敬自身であると云う事とは同じではない。

木藤氏や伊地知氏も述べられる様に書陵部本の中には、かなり初歩的な用字の間違いもみられるし、花押の点も問題である。

六　結　　語

「ささめこと」の尊経閣本と書陵部本について主としてその内容面の対比を行ない、各独自の本文と思われるものを検討する事によ

って、書陵部本の方が尊経閣本より整ったものである事が知られ書陵部本を改編本であると考えた。しかもその独自の部分は心敬の文章と考えられるものである点から、改編者は心敬自身であると断定してよいと考えられる。特に、美的理念をめぐって明らかに両本の間に考え方の相違のみられる事は注目しなければならない。

その改編の時期については内容面での対比の面からは明らかな年代は定められないが、尊経閣本制作の時よりはかなり後と考えたい。この場合書陵部本の奥書に寛正二年とある事を如何に考えるかゞ問題である。これについては前記内容面の検討からは明確な解決はつかず、目下の処は、書陵部本の奥書を心敬の記憶違いか或いは書き誤りとする先学の説に従う外なく、書陵部本の筆者の問題と共に今後の考究が必要とされるのである。

この様な問題を残すものの、内容の比較の面から考えると、「ささめこと」は、尊経閣本系統の本が多く残っていると云う理由でこの系統の本を重視すると云うのではなく、現存の本の数こそ少いが、書陵部本系統のものの方がその内容面でより整ったものであり、精撰された本としてその価値を認めてよいのではないかと結論される。

註(1)　木藤才蔵氏　「校注ささめこと　研究と解説」

註(2)　伊地知鉄男氏　書陵部本「ささめごと」解題

(1)　　日本古典文学大系本と書陵部本の頁番号対比　　そ の (1)

日本古典文学大系本→書陵部本　　段区分は日本古典文学大系の区分による

段	日本古典文学大系本 自 頁	行	至 頁	行	書陵部本 自 頁	行	至 頁	行
1	121	1	121	7	2	1	3	6
2	〃	8	122	7	3	7	6	5
3	122	8	122	15	6	6	8	2
4	123	1	123	13	8	3	11	1
5	123	14	124	8	11	2	13	2
6	124	9	126	7	13	2	16	2
7	126	8	127	11	下 17	1	19	6
	127	16	129	4	な し			
	129	5	132	2	〃			
8	132	3	〃	11	6	3	18	5
	〃	12	133	9	33	6	35	8
9	133	10	134	3	26	1	27	
10	134	4	135	12	20	1	23	7
11	135	13	137	4	28	1	30	
12	137	5	〃	9	31	1	32	1
	〃	10	138		35	9	39	
13	139	1	139	11	下 46	1	49	3
	〃	12	〃	13	下 50	9	51	2
14	139	14	141	5	50	1	53	
15	141	6	〃	13	下 15	4	16	
16	〃	14	142	10	下 24	1	26	
17	142	11	〃	15	下 27	4	28	3
	143	1	143	10	下 29	1	30	
18	〃	11	〃	12	67	4	67	6
	〃	13	〃	15	69	8	70	1
	144	1	144	7	70	5	71	6
19	〃	8	〃	11	下 36	9	37	8
	〃	12	145	2	下 38	1	38	10
20	145	3	〃	7	下 46	4	47	2
	〃	8	146	2	下 48	8	50	8
21	146	3	147	1	48	1	49	
22	147	2	148	2	下 39	1	42	4
23	148	3	〃	10	44	1	45	
24	〃	11	149	3	46	1	47	8
25	149	4	〃	12	下 35	1	36	8
26	〃	13	〃	14	67	1	67	4
	150	1	150	3	〃	7	68	3
	〃	4	〃	5	69	4	69	6
27	〃	6	〃	12	下 32	3	33	
28	〃	13	151	8	78	1	79	
29	151	9	152	13	80	1	83	
30	152	14	153	7	84	1	85	4
31	153	8	〃	12	86	1	86	7
32	153	13	154	4	87			
33	154	5	〃	6	下 2	1	2	5
	〃	6	155	10	3	9	6	6
	155	11	156	2	な し			
34	156	3	〃	5	88	1	88	5
	〃	5	157	4	92	2	93	
	157	5	〃	7	94	1	94	6
	〃	10	157	14	95	4	96	2
	158	1	158	7	96	6	97	6
	〃	8	〃	12	98	1	98	8
	〃	13	159	5	99	4	100	
35	159	6	160	14	101	1	104	4
	160	15	161	1	な し			
36	161	2	〃	8	下 56	1	57	5
37	〃	9	〃	13	下 58	1	58	
38	162	1	162	9	下 54	3	55	
39	〃	10	163	9	下 51	3	53	
	163	1	164	14	115	1	118	14
	164	14	165	5	な し			
	165	6	165	16	105	6	106	
	166	1	166	11	112			
	〃	12	167	6	111			
	167	7	168	1	114			
	168	2	〃	11	113			
	〃	12	169	7	109			
	169	8	170	2	107			
	170	3	〃	13	110			

(1)　　日本古典文学大系本と書陵部本の頁番号対比　　その (2)

段	日本古典文学大系本 自 頁	行	至 頁	行	書陵部本 自 頁	行	至 頁	行
	170	14	171	8	108			
	171	9	172	5	な し			
40	173	3	173	7	88	5	89	4
	〃	9	174	8	90	1	92	2
	174	10	〃	11	95	1	95	3
	〃	11	〃	13	96	3	96	5
	〃	14	〃	15	97	6	97	
	〃	15	175	1	98	9	99	3
41	175	3	176		下 10	1	15	3
42	177				64	1	66	
43	178	1	179	12	54	1	57	
44	179	13	182	3	58	1	63	
45	182	6	〃	7	70	1	70	4
	〃	8	183	7	71	7	74	
46	183	8	〃	11	75			
	183	14	184	3	76	3	76	10
47	184	5	185	7	40	1	43	
	185	8	〃	11	下 31	7	32	
48	185	14	〃	15	下 28	5	28	8
	186	1	186	3	下 27	1	27	3
	〃	4	〃	8	な し			
	〃	9	〃	13	下 31	1	31	6

段	日本古典文学大学本 自 頁	行	至 頁	行	書陵部本 自 頁	行	至 頁	行
49	〃	14	187	2	な し			
	187	3	188	4	下 7	2	9	
	188	5	〃	6	な し			
50	〃	7	189	14	下 20	1	23	
51	189	1	190		下 42	5	45	
52	191	3	191	12	68	3	69	1
53	191	13	193	14	下 59	7	64	4
54	193	15	194	8	下 64	5	65	
55	194	9	195	9	下 66	1	67	
56	195	10	196	10	下 70	4	72	
	196	11	〃	15	下 73	3	73	6
	〃	16	197	11	下 68	1	70	2
57	197	12	198	9	下 73	10	75	8
58	198	10	199	3	下 75	9	77	7
59	199	5	201	9	下 77	8	84	2
	201	10	202	1	下 84	3	85	
60	202	2	203	8	下 86	1	90	6
61	203	9	〃	14	下 90	11	91	
	〃	15	204	1	下 93	1	93	3
	204	2	〃	3	な し			
62	〃	4	〃	10	下 94			

(2)　　書陵部本と日本古典文学大系本の頁番号対比　　その (1)

書陵部本→日本古典文学大系本　段の区切りは木藤氏類従本の区切りによる

段	書陵部本 自 頁	行	至 頁	行	日本古典文学大系本 自 頁	行	至 頁	行	段	書陵部本 自 頁	行	至 頁	行	日本古典文学大系 本 自 頁	行	至 頁	行
1	2	1	3	6	121	2	121	7	22	80	1	83		151	9	152	13
2	3	7	6	5	〃	8	122	7	23	84	1	85		152	14	153	7
3	6	6	8	2	122	8	122	15	24	86				153	8	〃	12
4	8	3	11	1	123	1	123	13	25	87				〃	13	154	4
5	11	2	16	2	〃	14	126	7	26	88	1	88	5	156	3	156	5
6	16	3	18	5	132	3	132	11		〃	5	89	4	173	3	173	7
	18	5	20		な	し				89	4	〃	7	な	し		
7	20	1	23	7	134	4	135	12		90				173	9	174	3
	23	7	25		な	し				91	1	91	3	な	し		
8	26	1	27		133	10	134	3		〃	3	92	2	174	4	174	8
9	28	1	30		135	13	137	4		92	2	94	6	156	5	157	7
10	31	1	32	1	137	5	〃	9		94	6	94	10	な	し		
	32	1	33	5	な	し				95	1	95	3	174	10	174	11
	33	6	35	8	132	12	133	8		〃	4	96	2	157	10	157	16
	35	9	39		137	10	138			96	3	96	5	174	12	174	13
11	40	1	43		184	5	185	7		〃	6	97	4	158	2	158	6
12	44	1	45	5	148	3	148	10		97	5	〃	9	174	13	174	15
13	46	1	47		〃	11	149	3		98	1	98	8	158	8	158	12
14	48	1	49		146	3	147	1		〃	9	99	3	174	15	175	2
15	50	1	53		139	14	141	5		99	3	100	2	158	13	159	5
16	54	1	57		178	1	179	12		100	4	〃	6	157	9		
17	58	1	63		179	13	182	3	27	101	1	104	4	159	6	160	14
18	64	1	66		177				28	105	1	105	5	な	し		
19	67	1	67	4	149	13	149	14		〃	6	106		165	6	165	15
	〃	4	〃	6	143	11	143	12		107				169	8	170	2
	〃	7	68	3	150	1	150	3		108				170	14	171	8
	68	3	69	3	191	3	191	12		109				168	13	169	7
	69	4	〃	6	150	3	150	4		110				170	3	170	13
	〃	7	〃	8	143	13	143			111				166	11	167	6
	70	1	70	4	182	6	182	7		112				〃	1	166	11
	〃	5	71	6	144	1	144	7		113				168	2	168	12
	71	7	74		182	8	183	7		114				167	7	〃	1
20	75	1	76		183	8	184	3	29	115		118		163	10	164	14
	77				な	し			下巻								
21	78	1	79		150	13	151	8	30	2	1	2	6	154	5	154	6

段	書陵部本 自 頁	行	至 頁	行	日本古典文学大系本 自 頁	行	至 頁	行	段	書陵部本 自 頁	行	至 頁	行	日本古典文学大学本 自 頁	行	至 頁	行
	2	6	3	8	な	し				49	1	49	3	139	10	139	11
	3	9	6		154	6	155	10		〃	4	50	8	145	10	146	2
	7	1	9		187	3	188	4		50	9	51	2	139	13	139	14
31	10	1	15	3	175	3	176		41	51	3	54	2	162	10	163	9
32	15	4	16		141	6	141	13	42	54	3	55		〃	1	162	9
33	17	1	19	6	126	8	127	11	43	56	1	57	5	161	2	161	8
	19	7	19	10	な	し				57	6	〃	10	な	し		
	20	1	23		188	7	189	14	44	58	1	58	9	161	9	161	14
34	24	1	26		141	14	142	10		〃	9	59	6	な	し		
	27	1	27	3	186	1	186	3	45	59	7	64	4	191	13	193	14
	〃	4	28	3	142	12			46	64	5	65		193	15	194	8
	28	5	〃	8	185	14	185	15	47	66	1	67		194	9	195	9
	29	1	30		143	1	143	10		68	1	70	2	196	16	197	11
	31	1	31	6	186	9	186	13		70	4	73	8	195	10	196	15
	〃	7	〃	8	185	8	185	11		73	9	75	8	197	12	198	9
35	32	3	34		150	6	150	12	48	75	9	77	7	198	10	199	3
36	35	1	36	8	149	4	149	12	49	77	8	85		199	5	202	1
37	36	9	38		144	8	145	2	50	86	1	90	6	202	2	203	8
38	39	1	42	4	147	2	148	2	51	90	11	91		203	9	〃	14
39	42	5	45		189	15	190			92	1	92	5	な	し		
40	46	1	46	3	139	1	139	2	52	92	6	〃	9	〃			
	〃	4	47	2	145	4	145	7		93	1	93	3	203	15		
	47	2	48	6	139	3	139	9		93	4	〃	6	な	し		
	48	7	48	9	145	8	145	9	53	94				204	4	204	10